

第4期第1回詳細

救急救命一刻争う

ウェブ配信で状況証言

311
次世代塾
 伝える／備える

単位認定する大学や学部もある。講座の概要を掲載したチラシと応募フォームを河北新報オンラインニュースで

公開している。連絡先は事務局の河北新報社防災・教育室022(211)1591。メールはjisedit@poh.kahoku.co.jp

応募フォームのQRコード



メモ 311「伝える／備える」次世代塾を運営する推進協議会の構成団体は次の通り。河北新報社、東北福祉大、仙台市、東北大、宮城教育大、東北学院大、東北工業大、宮城学院女子大、尚絅学院大、仙台百百合女子大、宮城大、学都仙台コンソーシアム、日本損害保険協会、みちのく創生支援機構。

受講生の声

苦悩計り知れず

精神的な負担など、捜索と救助の現場に携わった人の苦悩は計り知れません。講師の話は詳細で当時の状況を想像でき、体験者の話を聞く大切さを感じました。あの時、起きたことを、私たちの世代が伝えなければならぬという意識が強まりました。

使命感強さ知る

自身も被災しながら、現場で最善を尽くす医療関係者の使命感の強さを知り、尊いと感じました。まず自分の命を守ることが、災害医療の目的である「最大多数への最大善」につながると思います。災害時にどう行動し命を守るのか、考えたい。



(塩釜市・宮城教育大3年) 黒川直輝さん・20歳



(仙台市泉区・宮城大3年) 伊藤千聖さん・20歳

東日本大震災の伝承と防災の担い手育成を目的に河北新報社などが開く通年講座「311『伝える／備える』次世代塾」第4期は、第1回講座のウェブ配信を始めた。「救急救命の現場」をテーマに、仙台市太白消防署消防司令補の小野寺修さん(46)と石巻赤十字病院(石巻市)の看護師長渋谷多佳子さん(54)が、震災発生後の被災地や病院の過酷な状況を証言している。

「多くの遺体」と説明。「多くの遺体と対面する救助関係者の心のケアを準備しておく必要がある」と訴える。病院で救急外来担当だった渋谷さんは「患者が殺到し、ロビーは野戦病院のよう」と振り返る。病院関係者は自らも被災した中で業務を遂行。「患者対応の準備をしていた半面、医療従事者の被災は想定外だった」と教訓を述べている。

4期の受講生を募集している。対象は10代後半〜20代前半の高校生や大学生、社会人で受講無料。出席、レポート提出の条件を満たした人に修了証を交付する。

小野寺さんは当時、若林消防署荒浜航空分署に所属。消防ヘリによる救助活動を「低体温症の被災者を何人も見ていたので、スピード勝負の思いが強かった」

前半の高校生や大学生、社会人で受講無料。出席、レポート提出の条件を満たした人に修了証を交付する。



津波被災地で行方不明者を捜索する消防隊員
 =2011年4月6日午前10時ごろ、仙台市若林区荒浜